

# 痴人と死と

ホフマンスタアル Hugo von Hofmannsthal

森鷗外訳

青空文庫



為事室<sup>しごとべや</sup>。建築はアンピイル式。背景の右と左とに大いなる窓あり。真中<sup>まんなか</sup>に硝子<sup>ガラス</sup>の扉ありてバルコンに出づる口となりおる。バルコンよりは木の階段にて庭に降るるようなりおる。左には広き開き戸<sup>ひら</sup>あり。右にも同じ戸ありて寝間<sup>ねま</sup>に通じ、この分<sup>ぶん</sup>は緑の天鷲絨<sup>びろうど</sup>の垂布<sup>たれぎぬ</sup>にて覆いあり。窓にそいて左の方<sup>かた</sup>に為事机あり。その手前に肱<sup>ひじつ</sup>突<sup>き</sup>の椅子<sup>いす</sup>あり。柱ある処<sup>ところ</sup>には硝子の箱を据え付け、その中に骨董<sup>こつとう</sup>を陳列す。壁にそいて右の方<sup>かた</sup>にゴチック式の暗色の櫃<sup>ひつ</sup>あり。この櫃には木彫<sup>もくちよう</sup>の裝飾をなしあり。櫃の上に古風なる楽器数個あり。伊太利亞名家<sup>イタリア</sup>の画<sup>えが</sup>ける

絵のほとんど真黒まくろになりたるを掛けあり。壁の貼紙はりがみは  
明色、ほとんど白色にして隠起いんきせる模様及金箔およびぎんぱくの装飾  
を施せり。

主人クラウヂオ。ひとりかたわら（独窓の傍に座しおる。夕陽ゆうひ。）夕陽の照す濡しめ

った空気に包まれて山々が輝いている。棚引しらくもいている白雲は、

上の方に黄金色こがねいろの縁ふちを取つて、その影は灰色に見えている。

昔の画家えかきが聖母を乗せる雲をあんな風にえがいたものだ。山の

裾すそには雲の青い影が印いんせられている。山の影は広い谷間に充みち

て、広野ひろのの草木くさきの緑に灰色を帯びさせている。山の頂の夕焼は

最後の光を見せている。あの広野ひろのを女神達めがみたちが歩いていて、手

足の疲れる代りかわには、尊とうとい草を摘み取つて来るのだが、それが

何だか我身に近付いて来るように思われる。あの女神達は素足  
 で野の花の香かを踏んで行く朝風に目を覚し、野の蜜蜂みつばちと明る  
 い熱い空気とに身の周囲まわりを取り巻かれているのだ。自然はあれ  
 に使われて、あれが望のぞみからまた自然が湧わく。疲れてもまた元に  
 返る力の消長の中に暖かい幸福があるのだ。あれあれ、今黄金こがね  
 の珠たまがいぎつて遠い海の緑の波の中に沈んで行く。名残なごりの光は  
 遠方の樹々きぎの上に瞬またたきをしている。今赤い靄もやが立ち昇る。あの靄  
 の輪廓りんかくに取り巻かれている辺には、大船おおぶねに乗って風波ふうはを破  
 って行く大胆な海かいこく国の民の住んでいる町々があるのだ。その  
 船ふなびと人はまだ船の櫓ろの掻かき分けた事のない、沈黙うしおの潮の上を船  
 で渡るのだ。荒海あらくみの怒いかりに逢あうては、世の常まよいくるしみの迷も苦も無くな

つてしまふであろう。己おれはいつもこんな風に遠方を見て感じて  
いるが、一転して近い処を見ると、まあ、何たる殺風景  
な事だろう。何だかこの往来、この建物の周囲まわりには、この世に  
生うまれてから味わずにしまった愉快や、泣かずに済んだ涙や、意  
味のないあこがれや、当あての知れぬ恋なぞが、靄ものようになつて  
立ち籠こめているようだ。（窓に立ち寄る。）何処どこの家うちでも今燈あ  
火かりを点つけている。そうすると狭い壁と壁との間に迷まよいや涙で包ま  
れた陰気な世界が出来て、人の心はこの中うちに擣とりこ  
うのだ。あるいは幾いくたり人あつま  
つたり、あるいは誰たれか一人に憂うれしき事があるという、皆みんなが寄つ  
て慰めるのだ。しかし己は慰めという事を、ついぞ経験した事

がない。ほんに世の中の人々は、一寸ちよつとした一言ひとことをいうては泣き合つたり、笑い合つたりするもので、己のように手の指から血を出して七重ななえに釘付くぎづけにせられた門かどの扉たたを叩くのではない。一体己は人生というものについて何を知っているのだろうか。なるほどどうやら己も一生というものの中うちに立っていたらしゅうは思われる。しかし己は高たかが身の周囲まわりの物事を傍観して理解したというに過ぎぬ。己と身の周囲まわりの物とが一しよに織り交ぜられた事は無い。周囲まわりの物に心を委ゆたねて我われを忘れた事は無い。果ては人と人とが物を受け取つたり、物を遣やつたりしているのに、己はそれを余所よそに見て、唾おしや聾つんぼのような心でいたのだ。己はついで可哀かわいらしい唇から誠の生せい命めいの酒を吞のませて貰もらつた事はな

い。ついぞ誠まことの嘆なげきにこの体を揺ゆられた事は無い。ついぞ一人で  
啜すすり泣なきをしながら寂さびしい道を歩いた事はない。どうかした拍  
子でふいと自然たまたまの好たい賜たまに触れる事があつてもはつきり覚めて  
いる己の目はその朧おぼろげ気さいわいな幸を明るみへ引出して、余りはつき  
りした名を付けてしまったのだ。そして種いろいろ々な余所の物事と  
それを比べて見る。そうすると信用というものもなくなり、幸  
福の影が消えてしまう。たまたま苦勞なげきらしい事があつ  
ても、己はそれを考かんがえの力で分析してしまつて、色の褪さめた氣の  
抜けた物にしてしまったのだ。ほんに思えばあの嬉うれしさの影を  
この胸むねにぴったり抱だき寄せるべきであつたらうに。あの苦勞の  
影かげを熟よく味あじつたら、その中うちからどれ程嬉うれしさが沸わいたやら知れ

なんだ物を。ああ、悲の翼は己の体に触れたのに、己の不性  
 なために悲の代に詰まらぬ不愉快が出来たのだ。（物に驚きた  
 るように。）もう暗くなつた。己はまた詰まらなくよくよと  
 物案じをし出したな。ほんにほんに人の世には種々な物事が  
 出来て来て、譬えば變つた子供が生れるような物であるのに、  
 己はただ徒に疲れてしまつて、このまま寝てしまわねばならぬ  
 のか。（家来ランプを点して持ち来り、置いて帰り行く。）え  
 え、またこの燈火が照すと、己の部屋のがらくた道具が見える。  
 これが己の求める物に達する真直な道を見る事の出来ない時、  
 厭な問道を探し損なつた記念品だ。（十字架の前に立ち留ま  
 る。）この十字架に掛けられていなさる耶蘇殿は定めて身に覚

えがあるう。その疵きずのある象牙ぞうげの足の下に身を倒して甘い焰ほのおを胸うちの中に受けようと思ひながら、その胸は煖あたたまる代かわりに冷え切つて、悔くやや悶みもや恥だえのために、身も世もあられぬ思おもいをしたものが幾いくたり人あつた事やら。（一面の古画の前に立ち留まる。）お前はジヨコンダだな。その秘密らしい背景の上に照り輝いて現われている美しい手足や、その謎なぞめいた、甘いような苦いような口元や、その夢の重みを持つている瞼まぶたの飾かざりやが、己に人生というものをもどれだけ教えてくれたか。己の方からその中へ入れた程しきや出して見せてはくれなかつたでは無いか。（身を返して櫃びんの前に立ち留まる。）この盃さかずきの冷たい縁ふちには幾いく度たびか快樂ねいろの唇くちびるが夢ゆめ現うつの境さかいに触れた事であろう。この古い琴の音色には

幾度か人の胸に密やかな漣が起つた事であろう。この道具の  
 どれかが己をそういう目に遇わせてくれたなら、どんなにか有  
 難く思つたらうに。この木彫や金彫の様々な図は、瓶もあれ  
 ば天使もある。羊の足の神、羽根のある獣、不思議な鳥、また  
 は黄金色の堆高い果物。この種々な物を彫刻家が刻んだ  
 時は、この種々な物が作者の生々した心持の中から生  
 れて来て、譬えば海から上つた魚が網に包まれるように、芸術  
 の形式に包まれた物であろう。己はお前達の美に縛せられて、  
 お前達を弄んだお蔭で、お前達の魂を仮面を隔てて感じるよう  
 に思つた代には、本当の人生の世界が己には霧の中に隠れてし  
 まつた。お前達が自分で真の泉の辺の真の花を摘んでいながら、

己の体を取り巻いて、己の血を吸つたに違いない。己は人工を弄んだために太陽をも死んだ目から見、物音をも死んだ耳から聴くようになったのだ。己は何日いつもはつきり意識してもいず、また丸で無意識でもいず、浅いたのしみ楽なげき小さい嘆なげきに日を送つて、己の生涯は丁度半分はまだ分らず、半分はもう分らなくなつて、その奥の方にぼんやり人生が見えている書物しよもつのようなものになつてしまった。己の喜よろこびだの悲かなしみだのというものは、本当の喜や悲でなくつて、謂いわば未来の人生の影を取り越して写したもので、さもなくば本当に味のある万有のうつろな図のようなものであつて、己はつまり影と相撲を取つていたので、己の慾よくという慾は何の味をも知らずに夢うちの中に草臥くたびれてしまったのだ。振返つ

て己の生涯を見れば、走つて道が抄はかどらず、勇を振ふるつて戦いに勝たれず、不幸があつても悲しくないし、幸福があつても嬉しくないし、意味の無い問には意味の無い答が出て来る。暗やみの闕しきいから臆おそ気な夢が浮んで、幸福は風のように捕とらえ難い。そこで草くたび臥れた高慢の中にある騙だまされた耳目は得うべき物を得る時無く、己はこの部屋にこの町に辛抱して引き籠こもつているのだ。世間の者は己を省みないのが癖になつて、己を平凡な奴やつだと思つているのだ。(家来来て 桜さくらんぼ 実 一皿を机の上に置き、バルコンの戸を鎖とぎさんとす。)戸はまあ開けて置け。(問ま。)何をそんなに吃びっくり驚おどするのだ。

家来。申上げてても嘘うそだといつておしまいなさいましょう。(半ば

ひとりごと  
 独 言のようにな、心配らしく。ははあ、あの離座敷はなれざしきに隠れておったわい。

主人。誰たれが。

家来。何だかわたくしも存じません。厭らしい奴が大勢でございます。ます。

主人。乞食こじきかい。

家来。如何いかがでしょうか。

主人。そんなら庭から往来へ出る処の戸を閉めてしまつて、お前はもう寝るが好いい。己おれには構あわないでも好いいから。

家来。いえ、そのお庭の戸は疾とつくに閉めてあるのでございますから、気味が悪うございます。何しろ。

主人。どうしたと。

家来。ははあ、また出て来て、庭で方々へ坐すわりました。あのアポルコの石像のある処の腰掛に腰を掛ける奴もあり、井戸の脇わきのこかげにしやが蹲む奴もあり、一人はあのスフィンクスの像に腰を掛けました。丁度タクスの樹の蔭になつて好よくは見えません。

主人。皆みんなな男かい。

家来。いえ、男もいますし女もいます。乞食らしい穢きたない扮装みなりではございません。銅版どうばんえ画なんぞで見るような古風な着物を着ているのでございます。そしてそのじいつと坐っている様子の氣味の悪い事つたらございません。死人しにんのような目で空を睨にらむように人の顔を見ています。おお、氣味が悪い。あれは人間では

ございませんぜ。旦那様、お怒なすつてはいけません。わたしは何と仰おつしやつても彼奴あいつのいる傍そばへ出て行く事は出来ません。もしか明日あしたの朝起きて見まして彼奴あいつが消えて無くなつていければ天たすけの助たすけというものでございます。わたくしは御免ごうむを蒙りまして、お家の戸うち閉とじまりだけいたしまして、錠前の処へはお寺から頂いて来たお水でも振り掛けて置きましょう。何にいたせわたくしはついぞあんな人間を見た事もございせんし、また人間があんな目付めつきをいたしているはずがございせん。

主人。どうともお前の勝手にするが好い。もう用事はないから下さがつて寝てくれい。(暫しばらく物を案ずる様子にてあちこち歩く。舞台の奥にてヴァイオリンの音ね聞ゆ。物懐しげに人の心を動かす

響なり。初めは遠く、次第に近く、終にはその音暖かに充ち渡りて、壁隣かべとなりの部屋より聞ゆる如し。ごと）音楽だな。何だか不思議に心に沁み入るような調べだ。あの男が下らぬ事を饒舌しゃべつたので、己まで気が狂ったのでもあるまい。人の手で弾くヴァイオリンからこんな音ねの出るのを聞いたことはこれまでに無いようだ。（右の方に向き、耳を聳そばだてて聞く様子にて立ちおる。）何だか年頃としごろ聞きたく思つても聞かれなかつた調べしらべでもあるように、身に沁みて聞える。限なき悔かぎりのようにもあり、限なき希望ふるいえのようにもある。この古家の静かな壁うちの中から、己おれ自身の生涯が浄められて流れ出るような心持がする。譬えば母とか恋人とかいうようななくなつてから年を経たものがまた帰つ

て来たように、己の心の中に暖いうちあたたかような敬けいけん虔けんなような考かんがえが浮  
んで、己を少年の海に投げ入れる。子供の時、春の日和ひよりに立っ  
ていて体が浮いて空中を飛ぶようで、際限はてしも無いあくがれが  
胸に充ちた事がある。また旅をするようになってから、ある時  
は全世界が輝き渡つてぼら薔薇の花が咲き、鐘の音が聞えて余所の  
光明に照されながら酔えいご心地こちになつていた事がある。そういう  
時はあらゆる物事が身に近く手に取るように思われて己も生き  
た世界の中の生きた一人と感じたものだ。そういう時はあらゆる  
人の胸を流れる愛の流ながれが、己の胸にも流れて来て、胸が広う  
なつたような心持がしたものだ。今はそんな心持は夢にもせぬ。  
この音楽がもう少しこのまま聞えていて、己の心を感動させて

くれれば好い。これを聞いている間は、何だか己の性命が暖かく面白く昔に帰るような。そして今まで燃えた事のある甘い焰ことごとが悉く再生して凝り固かたまった上皮を解かしてしまつて燃え立つようだ。この良心の基礎から響くような子供らしく意味深げな調を聞けば、今まで己の項うなじを押おしかが屈かめていた古臭い錯雜ちしきした智識の重荷が卸されてしまうような。そして遠い遠い所にまだ夢にも知らぬ不思議の生活があつて、限無き意味を持つている形式に現われているのが、鐘の音ねで知らされているような。(ほとんど突然と音楽の声止やむ。)や、音楽が止んだ。己の心を深く動かした音楽が、神と人との間の不思議を聞きせるような音楽が止んだ。大方おおかた己のために不思議の世界を現じた楽人は、詰ら

ぬ乞食か何かで、門かどに立つて楽器を鳴らしていたのが、今は曲を終おわつたので帽子でも脱いで、その中へ銅貨を入れて貰おうとしているのだろう。（右手の窓の処ところに立ち寄る。）この窓の下したの処には立っていない。どうも不思議だ。何処どこにいるのか知らん。あつちの方の窓から覗のぞいて見よう。（右手扉の方へ行ゆかんとする時、死あらわれ、徐しずかに垂たれぎぬ布うしろを後にはねて戸口に立ちおる。ヴァイオリンは腰に下げ、弓を手に持ちいる。驚きてたじたじと下さがる主人を、死は徐しずかに見やりいる。）まあ、何という気味の悪い事だろう。お前の絃いとの音ねはあれほど優しゆう聞えたのに、お前の姿を見ると、体からだ中じゆうが縮あがみ上あがるような心持がするのはどうしたものだ。それに何だか咽のどが締ひまるようで、髪かみの毛けが

一本一本上に向いて立つような心持がする。どうぞ帰ってください。お前は死だな。ここに何の用がある。ええ気味の悪い。どうぞ帰ってください。ええ、声を立てようにも声も立てられぬわい。（へたへたと尻餅しりもちを突く。）命の空気が脱け出てしまうような。どうぞ帰ってください。誰がお前を呼んだのか。帰れ帰れ。誰がお前をこの内うちに入れたのか。

死。立て。その親譲りの恐怖心を棄すててしまえ。わしは何もそう気味の悪い者ではない。わしは骸骨がいこつでは無い。男神おがみジオニソスや女神めがみウエヌスの仲間で、靈魂の大御神おおみかみがわしじや。わしの戦そよぎは総すべて世の中の熟したものの周囲めぐりに夢のように動いておるのじや。其方そちもある夏の夕まぐれ、黄金色こがねいろに輝く空気の中うち

に、木の葉の一片が閃き落ちるのを見た時に、わしの戦ぎを感じた事があるであろう。凡そ感情の暖かい潮流が其方の心に漲つて、其方が大世界の不思議をふと我物と悟つた時、其方の土塊ちくれから出来ている体が顫えた時には、わしの秘密の威力が其方ちの心の底に触れたのじや。

主人。もう好い好い。解わかつた。まだ胸は支つかえているが、兎とに角かくお前を歓迎する。(間。)しかし何の用があつて此処ここへ来たのだ。

死。ふむ。わしの来るのには何日いつでも一つしか用事はないわ。

主人。まだそれまでには間まがあるはずだ。一枚の木の葉こはでも、枝を離れて落ちるまでには、たつぷり木の汁を吸っている。己はそこまでになつてはいぬ。己はまだ生きるといふように生きて

見た事がないのだ。

死。兎に角、誰も歩く命のうまやじ 駅路を其方も歩いて来たのじや。

主人。己も若い時はあつたに違いないが、その時は譬えば子供の  
むしつた野の花が濁つた流ながれの上に落ちて、我知らず流れるよう  
に、若い間あいだの月日は過ぎ去つて、己はついぞそれを生活だと思  
つた事は無い。それから己は生活の格子戸の前に永らく立つて  
いたものだ。そして何日いつかは雷かみなりのような音おとがして、その格子戸  
が開あくだろうと、甘いあくがれを胸に持つて待つていて見たけ  
れど、とうとう格子戸は開あかずじまつた。そうかと思えばあ  
る時己はどうしてはいつたともなく、その戸の中にはいつてい  
た事もある。しかしその時は己の心が何物かに縛られていて、

深い感じは起さずにしまった。そういう時は見ても見えず、聞いても聞えず、心は何処か余所になつてしまつていて、貴い熱も身を温めず、貴い波も身を漂わさず、他の人が何日か出會つて、一度は争つて、終には恵みを受ける習の神には己は逢わずにしまった。

死。いや。この世の生活をこの世らしゆう生きて通る事だけは、誰にも授けられているように、其方にも確に授けてあつた。其方の心の奥にも、このあらゆる無意味な物事の混沌たる中へ關係の息を吹込む靈魂は据えてあつた。この靈魂を寝かして置いて混沌たる物事を、生きた事業や喜怒哀樂の花園に作り上げずにいて、それを今わしが口から聞くというのは、其方の罪じ

や。人というものは縛せられてもおり、またある機会にはその縛ばくを解かれもするものじゃ。夢の中うちに泣いて苦勞に疲れて胸にはあくがれの重荷を負うて暖かい欲望を抑えながらも、熟すればわしの手に落ちるのが人生じゃ。

主人。その熟している己ではないから、どうぞ許して貰いたい。

己はまだこの世の土に噛かじり付いていたいのだ。お前に逢うての怖おそろしさに、己の縛ばくが解けてしまった。どうやらこれからは本當

に生きて見られそうな。今のように強い欲望があるからは、この世の物事に魂たましいを打入れて見る事も出来よう。これからさき生かして置いてくれるなら、己は決して他たの人間を物の言えぬ着物のように、または土偶でくか何かのように扱いはせぬ。どんな詰

まらぬ喜よろこびでも、どんな詰なげきらぬ歎なげきでも、己しんは真まから喜よろこんで真まから歎なげいて見る積つもりだ。人生の柱はしらになつてゐる誠まことというものもこれからは覚えて見たい。これからは善よきと悪わるとが己おのを自由に動うごかして、己おのを喜よろこばせたり怒おこらせたりするようにしようと思う。そうしたならば今まで影かげのように思おもつていた世よの中の物事ものごとが生いきて働くようになろう。そうしたら受うける身みも授あづかる身みも今までのように冷ひやかになつていないで、到いたる処ところ生いきた人間にんげんに逢あわれよう。(死しは冷然れいぜんとして取り合あわぬ様子ようすゆえ、主人しゅじんは次第おそに恐おそれを抱いだく。)

）どうぞどうぞ思おもい返かへして見てくれい。お前は己おのが愛あいをも憎にくをも閱けして来きたように思おもうであらうが、己おのはただの一度ひともその味あじを真まから嘗なめた事ことがない。つい表面うわの見みえや様子ようすや、空々くわし

い詞ことばを交して来たばかりだ。その証拠にお前に見せる物がある。この手紙の一束を見てくれい。(忙ひきだしがしげに抽斗を開け、一束の手紙を取り出す。)いだ恋の誓せいごん言、恋の悲歎ひたん、何もかもこの中に書いてはある。己が少しでもそれを心に感じたのだと思つて貰うと大違ちがいだ。(主人は手紙の束を死の足許あしもとに投げ付く。手紙床の上に飛び散る。)これが己の恋の生涯だ。誠という物を嘲あざみ笑つて、己はただ狂言をして見せたのだ。恋ばかりではない。何もかもこの通りだ。意義もない、幸福もない、苦痛もない、慈愛もない、憎悪もない。

死。阿房たわけものめが。好よいわ。今この世の暇いとまを取らせる事じゃから、たつた一度本ど当の生活というものを貴とうとばねばならぬ事を、其方そち

に教えて遣わそう。あつちに行つて黙つて立つていてここの処を好く見て、凡そこの世に生きとし生けるものは、皆な慈愛を保持しているのに、其方一人がうつろな心で戯けながらに世を渡つたのじやという事をしかと胸に覚えるが好い。

（死は物と呼び寄するが如き音をヴァイオリンにて弾じ出す。この時死は寢室の扉の傍、舞台の前の方、右手に立ちおり、主人は左手壁の方、薄暗き処に立ちおる。右手の扉を開きて主人の母出で来る。更けたりという程にはあらず。長き黒き天鷲絨の上着を着し、顔の周圍に白きレスを付けたる黒き天鷲絨の帽子を冠りおる。白き細き指にレスの付きたる白き絹の紛※を持ちおる。母

は静しずかに扉を開きて出で、静しずかに一間まの中うちをあちこち歩む。）

母。この部屋の空気を呼吸すれば、まあ、どれだけの甘い苦痛を覚える事やら。わたしがこの世に生きていた間あいだの生活の半分はラヴェンデルの草の優しい匂においのように、この部屋の空気に籠こもっている。人の母の生涯せいがいというものは、悲かなしみが三分一ぶで、後あとの二分ぶは心配せめくと責苦せめくとであろう。男おとこというものにはそれがちつとも分わらぬわいの。（櫃この傍そばにて。）この櫃この隅すみはまだ尖とがっているやう。日外いつぞや、あの子がここで頭かぶを打うって血ちを出だした事がある。まだ小さいのに気が荒あかったゆえ、走り廻まわつてばかりいて、あれ危あやないと思おもつても止とめる事が出来できななんだ。ああ、この窓まどじゃあの子が夜遊あそびに出いて帰かえらぬ時は、わたしは何時いつもここに立たつて

真ま黒くろな外を眺めて、もうあの子の足音がしそうなものじやと  
 耳を澄まして聞いていて、二時が打ち三時が打ち、とうとう夜よ  
 の明けた事も度々ある。それをあの子は知らなんだ。昼間も大  
 抵一人でいた。盆栽の花に水を遣ったり、布団の塵ちりを掃はらつたり、  
 扉つまみの撮しんちゆうの真しんちゆう 鋤うちを磨いたりする内に、つい日は経たつてしもう  
 た。その間あいだ、頭うちの中には、まあ、どんな物があつたらう。夢の  
 ような何とも知れぬ苦痛の感じが、車の輪まわの廻まわるように、頭なの  
 中なかに動うごいていた。あの何とも言えぬ心持は、この世界の深い深  
 い秘密と関係している人の母の心であろう。しかしもうわたし  
 にはあの甘い苦くるしみを持つている、ここの空気を吸う事は出来ぬ。  
 わたしはもう行かねばならぬ。(真ま中なかの戸口より出で去る。)

主人。お母様<sup>かあさま</sup>。

死。黙れ。其方<sup>そち</sup>が母はもう帰らぬわ。

主人。お母様。お母様。どうぞ今一度<sup>どここ</sup>此処へ戻つて来て下さりませ。このわたしの唇は何日<sup>いつ</sup>も確<sup>しつ</sup>り結<sup>か</sup>んでいて高慢らしく黙つていたのだが、今こそは貴女<sup>あなた</sup>の前に膝<sup>ひざ</sup>を突いて、この顫う唇を開けてわたくしの真心が言つて見たい。ああ、何卒<sup>どうぞ</sup>母上を呼んでくれい。引き留<sup>と</sup>めてくれい。何故<sup>なぜ</sup>お前は母上の帰つて行くのを見ているながら引留<sup>と</sup>めてはくれなんだか。

死。わしの知つた事では無い。母に対してどうするの<sup>みんな</sup>も、皆其方<sup>そち</sup>の思うままであつたのじや。

主人。ええ、この胸に何の感じもなかつたか。この身の根差<sup>ねざし</sup>はあ

のお母様であるのを、あのお母様のお側にいるのは、神の傍かたわらにいるのと同じわけであるのを、己は一度も知らなんだ。もうこうなつては取返しがつかぬわい。

(死は主人の煩悶はんもんを省みず、古民謡の旋律を弾たじ出す。

娘一人、徐しずかに歩み入る、派手なる模様あるあつさりとした

る上着を着、紐ひもを十字に結びたる靴を穿はき、帽子を着ず、

頸くびの周圍まわりにヴェエルを纏まとえり。)

娘。あの時の事を思えば、まあ、どんなに嬉しかったろう。貴方あなた

はもう忘れておしまいなされたか。貴方はわたしを非道ひどい目に

お逢あせなさいました。ほんにほんに非道いめに。だが、世の中

の事は何でも苦痛に終らぬ事は無い。ほんにわたしの嬉しいと

思つたその数は、指を折つて数えるほどであるけれど、その日の嬉しかった事は夢のようでごさいました。この窓の前の盆栽の花は、今もやはり咲いている。ここにはまたその頃のがたがたするような小さいスピネット（楽器）もある。この箏筥たんすはわたしに貴方に頂いた御文おふみを貴方の下すつた品物と一しよに入れて置いた処でございます。わたしのためには御文も品物も優しい唇で物をいつてくれました。何日いつやら蒸暑い日の夕方に、雨が降つて来た時に貴方と二人でこの窓の処に立つて濡れた樹々の梢こずえから来る薫かおりを聞いた事があります。ああ、何もかも皆みんな過ぎ去つてしまいました。そして皆みんなな儂い恋の小さい奥城おくつきの中に埋まつてしまいました。しかしその埋まつたものは何もかも

口でいわれぬ程美しゅうございました。それは貴方のせいで美しかつたのでございます。それなのに貴方はとうとうわたくしを無慙むざんにも棄すてておしまいなさいました。丁度花を持って遊ぶ子が、遊び倦あきてその花を打捨うちちやつてしまふように、貴方はわたしを捨てておしまいなさいました。悲しい事にはわたくしは、その時になつて貴方の心を繋つなぐようなものを持っていませんでした。(間。) 貴方の一番終しまいに下すつたあの恐ろしいお手紙が届いた時は、わたしは死のうと思ひました。それを今打明けて申すのは、貴方に苦しい思ひをさせようと思つて申すのではございません。それからわたしは貴方に最後の御返事ごへんじを致そうかと存じました。その手紙には非道く悲しい事も書かず、恨うらみが

ましい事も書かず、つい貴方のお心にわたしの心がよう分つて、  
貴方が今一度わたしを可哀く思つて少しばかり泣いて下さるよ  
うに書きたいと存じました。しかしわたしはどうとうその手紙  
を書かずにしまいました。そんな手紙が何になりましたしうぞ。  
何故なぜと申しまするのに、貴方の下すつたお手紙はわたしの心の  
中うちを光明と熱とで満したようで、わたしはあれを頂く頃はひるな  
中かも夢を見ているように、うろうろしておりましたが、あれ  
がどれだけの事であつたやら、後で思えばわたくしには分りま  
せん。仮令たといお手紙を上げたとして、虚うそが信まことになりもせず、涙をど  
れ程そそ注いでも死んだものが生き戻りはいたしません。世の中  
は不思議なもので、わたしもそのまま死にもせず、あれから幾い

十の寂しき厭苦さを閱した上でわたしは漸々死にました。そしてその時わたしは何卒貴方のお死なさる時、今一度お側へ来たいと心に祈つて死にました。それは貴方に怖い思をさせたり、貴方を窘めたりしようというのではございませぬ。譬えて申せば貴方が一杯の酒を呑乾しておしまいなさる時、その酒の香がいつか何処かであつた嬉しさの香に似ていると思召すように、貴方が末期にわたくしの事を思い出して下されば好いと思つたばかりでございます。(娘去る。主人は両手にて顔を覆いいる。娘の去るや否や、一人の男直に代りて入来る。年齢はおよそ主人と同じ位なり。旅路にて汚れたりと覺しき衣服を纏いいる。左の胸に突込んだるナイフの木の柄現われおる。この男舞台の

真まんなか中に立ち留まり主人に向いて語る。）

男。はあ。君はまだこの世に生きているな。永遠の洒落者しやれものめ。

君はまだホラチウスの書なぞを読んで世を嘲あざけっているのかい。

僕が物に感じるのを見て、君は同じように感じると見せて好く

も僕を欺だましたな。君はあの時何といった。実にこの胸に眠つて

いるものを、夜吹く風が遠い便たよりを持って来るようにお蔭で感じ

るといったのう。実に君は風の伝える優しい糸の音ねだったよ。

ただその風というものが実は誰かの昔吐いた息たれであったのだ。

僕の息でなければ外の人の息であったのだ。ほんに君と僕とは

大分長い間友人と呼び合つたのだ。ははあ、何が友人だ。君が

僕と共にしたのは、夜昼とない無意味の対話、同じ人との交つきあ

際、一人の女を相手にしての偽りの恋に過ぎぬ。共にしたとは

いうけれど、譬えば一家の主しゅうぼく 僕がその家を、輿こしを、犬を、

三度どの食事を、鞭むちを共にしていると変つた事はない。一人のた

めにはその家は喜見城きけんじょうで、一人のためには牢獄ろうごくだ。一人の

ためには輿は乗るもので、一人のためには輿は肩から血を出す

ものだ。一人のためには犬は庭へ出て輪くぐを潜つて飛ばせて見て

楽しむもので、一人のためには食物しょくもつをやつて介抱をするもの

だ。僕の魂たましいの生み出した真珠のような未成品の感情を君は取とつ

手遊おもちゃにして空中なげうに擲つたのだ。忽ち親たちましたしみ、忽ち疎うとんずるのが君

の習ならいで、咬かみ合せた歯をめつたに開かず、真心を人の腹中に置

くのが僕の性分であつた。不遠慮に何にでも手を触れるのが君

の流儀で、口から出かかった詞をも遠慮勝に半途で止めるのが僕の生付であつた。この二人の目の前にある時一人の女子が現れた。僕の五官は疫病にでも取付かれたように、あの女子のために蹣跚いてただ一つの的を狙つていた。この的この成就是暗の中に電光の閃くような光と薰とを持つているように、僕には思われたのだ。君はそれを傍から見て後で僕に打明てこう云つた。あいつの疲れたような渋いような威厳が気に入つた。あの若さで世の偽に欺かれたのを悔いたような処のあるのを面白く感じたと云つた。そこで欺して己が手に入れて散々弄んだ揚句に糟を僕に投げしてくれた。姿も心も変り果てて、渦巻いていた美しい髪の毛が死んだもののように垂れている化物に

して、それを僕に授けたのだ。それまでは、何処どこやら君の虚偽を感じてはいてもはつきり君を憎むという心もなかつたが、その時から僕は君を憎み始めて、君から遠ざかるようにした。その後のち僕は君と交まじわっている間、君の毒気どくきに中あてられて死んでいた心を振り起して高い望のぞみを抱いだいたのだが、そのお蔭で無慙しかくな刺客しかくの手にかかつて、この刃やいばを胸に受けて溝壑こうがくに捨てられて腐つてしまったのだ。しかし君のように誰のためにするでもなく、誰の恩を受けるでもなく、空むなしく生きて空しく死ぬるのに比べれば、僕は死んでも死し甲斐がいがあるのだ。（男去る。）

主人。誰のためにするでもなく、誰の恩を受けるでもない。（徐しずかに身を起す。）譬えば下手な俳優があるきっかけで舞台に出て

受持<sup>うけもち</sup>だけの白<sup>せり</sup>を饒舌<sup>しやべ</sup>り、周匝<sup>まわり</sup>の役者に構<sup>かま</sup>わずに己<sup>うぬ</sup>が声<sup>うぬ</sup>を己<sup>うぬ</sup>が  
 聞いて何にも胸に感<sup>か</sup>ぜずに楽屋に帰<sup>かえ</sup>つてしまふように、己<sup>おれ</sup>はこ  
 の世に生<sup>な</sup>れて来<sup>き</sup>て何の力もなく、何の価値もなく、このままこ  
 の世を去<sup>さ</sup>らねばならぬか。何でこれ程<sup>おもい</sup>の思<sup>おも</sup>いを己<sup>おれ</sup>はせねばならぬ  
 のか。何で死<sup>し</sup>が現<sup>あ</sup>われて来<sup>き</sup>て、こうまざまざと世<sup>さま</sup>の様<sup>よう</sup>を見せて  
 くれねばならぬのか。実在<sup>じざい</sup>のものが儚<sup>はかな</sup>い思<sup>おも</sup>い出<sup>いで</sup>の影<sup>かげ</sup>のように見  
 えるまで、真<sup>まこと</sup>の生活<sup>せいかつ</sup>の物事<sup>ぶつじ</sup>にこの心<sup>こころ</sup>を動かさねばならぬのか。  
 何故<sup>なぜ</sup>お前<sup>まへ</sup>の弾<sup>ひ</sup>いた糸<sup>いと</sup>の音<sup>ね</sup>が丁度<sup>ていど</sup>石<sup>いしかわら</sup>瓦<sup>わら</sup>の中に埋<sup>う</sup>められていた  
 花<sup>はな</sup>のように、意識<sup>いしき</sup>の底<sup>そこ</sup>に隠<sup>かく</sup>れている心<sup>こころ</sup>の世界<sup>せかい</sup>を搔<sup>か</sup>き乱<sup>みだ</sup>してくれ  
 たのか。ええ、こうなる上<sup>うへ</sup>は区<sup>く</sup>々<sup>く</sup>たる浮世<sup>うきよ</sup>の事<sup>こと</sup>に乱<sup>みだ</sup>されずに、  
 何日<sup>いっ</sup>もお前<sup>まへ</sup>の糸<sup>いと</sup>の音<sup>ね</sup>を聞<sup>き</sup>いてお前<sup>まへ</sup>の側<sup>そば</sup>にいるも好<sup>この</sup>かろう。己<sup>おれ</sup>を

死に導いてくれるなら己は甘んじて跟ついて行ゆこう。今までの己は生せいとはいっても真まことの生ではなかつたから、己は今から己の死を己の生にして見よう。死も生も認めぬ己が強つよいて今までの生といつて、お前を死と呼ばねばならぬはずがない。お前は僅わずか一秒うちの中に生涯を籠めて見せてくれた。そのお前の不思議な威力に己の身を任せてしまつて、今までの影のような生涯を忘れてしまおう。(暫く物を案ずる様子。) 思えばこう感じるのも死にかかつての一時じの事かも知れぬが、兎に角今までにこれ程感じた事はないから、己のためには幸福だ。このまま死んでしまうても、今我胸わがに充ちたものは、今までの色も香かもない生活には遥はるかに優まさっているに違ちがいない。己は己の存在を死んで初めて

知るのであろう。譬えば夢を見る人が、夢の感じの溢れたた  
 めに、眼の覚めるのと同じように、この生活の夢の感じの力で、  
 己は死に目覚めるのか。（息絶えて死の足許に伏す。）  
 死。（首を振りつつ徐に去る。）思えば人というものは、不思議  
 なものじゃ。解すべからざるものをも解し、文に書かれぬもの  
 をも読み、乱れて収められぬものをも収めて、終には永遠の闇  
 の中に路を尋ねて行くに見える。（中央の戸より出で去り、詞  
 の末のみ跡に残る。室内寂として声無し。窓の外に死のヴァイ  
 オリンを弾じつつ過ぎ行くを見る。その跡に跟きて主人の母行  
 き、娘行き、それに引添いて主人に似たる影行く。

○幕

(明治四十一年十二月)

# 青空文庫情報

底本：「於母影 冬の王 森鷗外全集」ちくま文庫、筑摩書房  
1996（平成8）年3月21日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：米田

2010年8月5日作成

2011年4月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 痴人と死と

ホフマンスタアル Hugo von Hofmannsthal

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 森鷗外訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>